

様式 1

平成 17 年度茨城大学社会連携支援経費申請書

茨城大学長 殿

申請者 所属 人文学部

コミュニケーション学科

代表者氏名 金本節子

下記の本年度の社会連携支援経費を申請いたします。

1. プロジェクト名(40字以内)

地域社会との連携による多文化社会に対応した異文化コミュニケーション授業の開発

2. プロジェクトの連携先と連携内容(別紙可)

連携先:NGO 茨城の会(代表:小野瀬武康)

連携内容:(1000字以内、連携の方法、内容、計画、期待される成果等を具体的に明記)
グローバル化の進展を背景に地域社会と世界が直結し、地域社会に多文化共生社会を展望する新たな異文化コミュニケーションが生まれつつある。本授業(「地域社会と異文化間コミュニケーション」人文学部コミュニケーション学科専門科目)では新たに到来しつつある多文化社会における異文化コミュニケーションの諸問題を国際交流と国際協力の両面から考えるため教育実践を積み重ねている。

<連携方法>

「NGO 茨城の会」(市民による国際協力 NGO グループのネットワーク)の協力により後期の授業で各国際協力 NGO グループの国内外での支援活動状況および異文化の人々との交流の実態を報告してもらい、多文化化する地域社会における異文化コミュニケーションの現状を把握し、その問題点や課題について討論する。

<内容>

- ① 後期の授業で、「NGO 茨城の会」に所属する国際協力 NGO グループ(フィリピン、タイ、モンゴルなど 6 カ国程度)による国内外での活動状況の報告と受講生との討論
- ② 地域社会で新たに活動を始めている大学生による国際協力グループと市民による国際協力グループの合同シンポジウムを企画し、新たな連携の可能性を模索する。

(別紙に続く)

申請分野 ①地域の教育力 2 地域環境形成、自治体との連携 3 産官学連携 4 学術文化 5 その他の地域との連携

別紙

<計画>

7月：大学生の国際協力活動グループとの連絡とシンポジウムに向けての準備の開始

8月：10月からの授業に向けて「NGO 茨城の会」との授業の準備およびスケジュール作成

10月～2月：上記の授業スケジュールにしたがって連携授業の実施

10月～11月：大学生の国際協力グループと市民の国際協力 NGO グループによる合同シンポジウム（「多文化共生社会と異文化コミュニケーション」（仮題））を実施する。

2月～3月：後期授業の総括と地域社会の異文化コミュニケーションをテーマとする卒業論文の発表を主内容とする懇談会の実施

<期待される成果>

- ① 過去3年間の教育実践活動を総合的、学際的に評価、分析し、地域社会と連携した新たな異文化コミュニケーション教育の一方法として確立する。
- ② 大学生の国際協力活動グループと市民の国際協力グループの合同シンポジウムの実現により、到来しつつある多文化共生社会における異文化コミュニケーションの諸問題について、世代を超えた意見交換の場を創出し、新たな連携の可能性を開くことができる。

3. 本プロジェクトにかかわるこれまでの経緯・実績(別紙可)

<平成13年度教育改善推進経費プロジェクトからの発展>

本プロジェクトの母体である「地域社会と異文化間コミュニケーション」(人文学部コミュニケーション学科専門科目)は、地域の国際協力 NGO のネットワーク「NGO 茨城の会」の協力を得て、2002年10月に開設が実現した地域社会と大学との連携授業である。この授業は前年の2001年度教育改善推進費(学長裁量経費)によって採択された「国際化・多様化をめざす大学授業の創出」のプロジェクトの一環として実施した公開授業がきっかけとなって発展したものである。

<過去3年間の教育活動>

その後、毎年、受講生と参加協力 NGO グループの双方からの授業評価と分析とによって授業内容と授業方法に改善を加えながら今年で4年目を迎える。その間、受講生からは、教室で世界各地の生活事情や国際協力の状況を把握できる。実際の経験に基づく報告に迫力があって新鮮、協力者側からは、長年の国際協力活動を客観的に捉え直すと同時に、若者の意見を活動に反映できる、活動内容を伝えようとすることで得るものは大きいとの好評価を得てきた。

<実質的な相互協力関係の構築>

また一方では、受講生が協力者の一人である JICA の国際交流推進員が全県の国際交流・協力ボランティア団体を対象として実施した実態調査に協力する機会を得たり、海外に同行し国際協力活動を経験する学生や、卒業論文のテーマとして地域の国際交流・協力活動を取り上げる受講生も出るなど、実質的な相互協力関係も徐々に促進している。

こうした授業活動の動向は2回の新聞記事として地方紙に取り上げられた。(常陽新聞「地域社会と異文化コミュニケーション」授業に NGO 活動の生の声」2002. 12.18、常陽新聞「実を結ぶ NGO 連携授業 一学生に問題意識芽生える」2005. 1.24)

<新たなコミュニケーションネットワークの可能性>

そのほか、上記 JICA の国際交流推進員の呼びかけに協力した学生交流がきっかけとなり、県内の複数大学の学生によって横断的に組織された国際交流グループ「MIX」が発足し、他の学生国際交流・協力団体との連携も広がり、地域社会に新たな国際交流・協力活動の可能性が生まれようとしている。

4. プロジェクト参加者(含む申請者)

氏名	学部・学科等	職名	分担内容
金本節子	人文学部・コミュニケーション学科	教授	全体の総括
小野瀬武康	NGO 茨城の会	代表	国際協力 NGO ネットワークの総括
	オイスカ茨城青年部	代表	フィリピンでの国際協力活動報告暗闘
	茨城県理事兼政策審議監		
菊池和博	モンゴル日本緑化委員会	代表	モンゴルにおける国際協力活動報告担当
長谷川典子	茨城アジア教育基金	代表	タイ・ラオスでの国際協力活動報告担当
新井康義	CANHELPTHAILAND	副会長	タイにおける国際協力活動
T・ガライエ	エチオピアの未来の子供	会長	エチオピアでの国際協力活動報告暗闘
山田 進	同上	副会長	同上
平井 廣二	ネパールに学校を造る会	代表	ネパールにおける国際協力活動報告担当
掛札 俊	日本 Bangladesh 文化交流会	代表	Bangladesh での国際協力活動報告担当
立田亜由美	茨城 JICA デスク	国際交流推 進員	JICA と市民の国際協力活動に関する調 査報告の担当